Report

続 第74回OMEPギリシャ大会報告

“We hugged, worked, discussed, planned, and had fun!”

OMEP世界大会に初めて参加して（後編）
―つながる保育心、ESD rating scale シンポジウム

木原 圭
全私保連青年会議総務部副部長、京都市・おいけあした保育園園長

ΓΕΙΑ ΣΑΣ（ヤーサス！：こんにちは！）アテネで行われた第74回OMEP世界大会に運よく参加できました私が、コロナ禍での海外渡航から大会参加、そして日本帰国までを2回に分けてリポートする後編です。

1　前号より―実践発表後の質疑……つながる保育心

子どもたちとやりたいことを一から考え行った自園でのお泊まり保育。コロナ禍で行動が制限されたことで改めて日常を見直すきっかけとなり、『足元には驚きが溢れていた（Sense of wonder at our feet）』そんなことを考えたという実践の発表でした。

まず会場から質問されたのは、コロナ禍において他者とつながることが難しい中で、どのようにして子どもたちが世界各国とコンタクトが取れたり大学の先生にインタビューができたのか？というものでした。なぜこのようなことができたか不思議に映ったようでしたが、私たちにとって特別な仕組みがあるわけではなく、単に私や職員の友人知人、または保護者を辿ったところ、そういった方々にたまたま巡り会えたのです。

また、子どもたちの視点の違いを多様性の起源ではないかという考え方がおもしろいとも言われました。前号では割愛しましたが、実践発表の中ではこのお泊まり保育を行うきっかけとなった自園の活動を紹介しました。それは年長児が行う「よく見て、発見しよう！」をテーマにした、園内にあるものを好きに選んで『スケッチ』をするプログラムです。鉢植えや樹木などの植物、昆虫や魚などの生物、机や椅子の家具類、時計やラジカセなどの家電類、友だちの顔など、子どもたちが選ぶものはさまざまですが、いつもそれぞれが注目していることの違いに驚かされます。例えば、同じひまわりをスケッチしたとしても、大人であれば必ず花に注目しそうですが、葉の葉脈に注目する子もいれば、茎の棘に興味を持つ子もいるし、なぜか植木鉢のロゴを細かくスケッチする子もいます。

大人が描き方を伝えなければ子どもたちは本当にのびのびと描くし、多種多様な見方が生まれてきて作品に明らかな『差』が出てきます。そんな何気なく見ているものもよくよく見れば

何か発見があり、この視点の違いこそ個性の生まれる源だと考えていて、子どもそれぞれの見方を大切にしているコンセプトの『スケッチ』です。

今回のお泊まり保育はそのコンセプトを応用して、日常でできることを『よく見る』ことでさまざまに子どもたちなりの『発見』が生まれ、それらが彼らの個性の源となっていくのではないかと、日常を掘り下げてみました。子どもたちが好きなものに注目して、大人の狭い常識にとらわれず、自由に意見を言い合える、自由に描いて表現できる、そんな環境こそ、彼らの多様性をどんどん発揮できる場だと考えていて、行動制限のあるコロナ禍のお泊まり保育のコンセプトにフィットしたのです。

また、その他の質問は、園紹介のためにデモ演奏をした年長児の手作りギターに関することや、日本がロックダウン（園を完全閉鎖）しなかった経緯や、私自身のような専門外（美大出身）でも園長ができる日本の保育の仕組みなど、分科会終了後もたくさんの質問を受け、見学や交流に関するお話もいただきました。

とにかく、あまり英語の得意でない私が辿々しいプレゼンをしていても、皆さん本当に食い入るように聞いてくださり、複雑なニュアンスの説明をしている時に、簡単に言い直してこういうことか?と訊ねてくれる参加者がいたり、まったく違う言語圏の人たちが40名ほどいる超多様性の会場には、興味津々な輝いた眼差しと温かい笑顔で溢れていたので、言葉がそれほどできなくても深い一体感を感じることのできた実践発表でした。『ＯＭＥＰは他の学術学会とは少し異なり、言葉が通じなくても保育心でつながっている組織』とＯＭＥＰ日本委員会の上垣内伸子会長もおっしゃっていましたが、まさに会場の皆さんと思いを共有し、つながれた瞬間でした。

2　OMEP world project : ESD rating scale シンポジウム

当日の分科会はアテネメトロポリタン大学が会場で、午前中に自園の実践発表を終え、午後からはもう1つの目的、世界ＯＭＥＰプロジェクトの１つ、ESD の実践度を測る“Rating Scale”のシンポジウムに参加しました。ここでは日本をはじめ、クロアチア、ウルグアイ、スウェーデン、チェコ、ボスニアヘルツェゴビナ、ウクライナ（当日欠席）の各国からの発表があり、流石にこれだけ多くの国の人が一堂に会するということでその多様性にワクワクしていたのですが、実際のところ会場にはもっと多くの国からの参加者がいる超々多様性の会場で、このシンポジウムが始まりました。

まず、コーディネーターであるストックホルム大学のイングリッドエングダールさんから、ESD Rating scale の成り立ちについて説明がありました。ＯＭＥＰのESDプログラムは８つのプロジェクトから構成されていて、その１つがESD Rating Scale についてのものとなります。２０１１年から始まったこれらは、持続可能な開発のための教育（ESD）について、どのように幼児教育者としてアプローチできるようにScale をつくるかという研究プロジェクトでした。２０１９年にはScale が第2版へ改定され、日本を含む19か国で試用が始まっています。

各国からそれぞれの進捗報告があったのですが、やはりコロナ禍で施設が完全に閉まったり、行動制限から施設外に出ることが難しくなったり、会議の中止や活動不可になったりと、どの国の保育現場でも大変難しい３年間だったとの

スウェーデンのイングリッドエングダールさん
（OMEP ヨーロッパ副総裁）

印象を受けました。しかし、その中でもできることから少しずつ動き出してきており、それぞれの国での工夫が発表されました。

今年動き始めたウルグアイは関係各局が連携し、この夏に試用が始まりました。クロアチアではすでにScaleの試用が始まっていて、取り組むべき課題の検出に役立つ一方、ESDの考え方が広範囲すぎてまだまだ現場の先生には難しいとのことでした。ボスニアヘルツェゴビナではローカルとグローバルをつなげてくれるものとして、就学前教育の先生の能力開発の一環としてScaleを使い始めていて、普段大切にしている遊びからの学びにESD概念をつなげていこうとしているとのことでした。

スウェーデンでは、『Sustainable Preschool 2021～2024』と名づけられた国家プロジェクトの一環として昨年秋に50施設の２００人の教師で試用を始め、その結果の数値分析もされていました。レッジョやテ・ファリキなどと同等に、世界で注目される５つのカリキュラムとして（Five Curriculum Outlines）（OECD,2004）、スウェーデンカリキュラムが知られていますが、この国では２０１９年よりESDが就学前教育の公式課題としてカリキュラムに既に加えられています。その具体的な内容は、

① 持続可能な開発に対する責任と関心を高める機会を持つこと

② 社会へ積極的に参加すること

③ 人間、自然、社会が互いにどのように影響し合うかについての理解をすること

④ 日常生活の中で人々が行うさまざまな選択が、いかに持続可能な開発に貢献し得るかを知る機会を持つこと

とされています。既に3年前から国を挙げてESDに取り組んでいることに、スウェーデンの意識の高さが窺われます。

SDGsはその目標として誰1人取り残さないことが掲げられていますが、日本ではその大義に反して企業の勝ち残り広告戦略のように使われることが多いので、本来の目的からはズレた印象があると感じていました。ただ、ＯＥＣＤでも提唱されている人生の始まりを力強くというStarting strongの理念で表されるように、私たちの幼児教育は未来を作る逞しい子どもたちの育成であり、すべての子たちに質の高い教育をというSDGs 4の概念、そしてSDGsすべての根幹とも言える4.7に記述されているESDは、これからの幼児教育に欠かせない概念であると言えるし、世界に住む1人としてその理解を日本でも始めていかなければならないと感じました。

ＯＭＥＰ日本委員会でもこのESDについての理解を深めるためにScaleの翻訳をしていて、ESD rating scale omepで検索すると10月から公開された日本語版がＯＭＥＰ日本委員会のサイトから入手できます。まずは園の誰でもいいので使ってみて、世界から見た自園の良いところ、また気づいていないところを見つけてみてください。そして、それらをもとにさまざまに意見を出し合い、保育の振り返りに使ってみてください。私たちの園では、試用することで少し今までと違った見方ができるようになりました。このスケールは良い悪いではなく、到達目標でもないので、捉え方は「10の姿」と似ているかも知れません。

そして、発表が私の番となりました。まずはＯＭＥＰ日本委員会として２０２１年に仮翻訳したバージョンを18の施設で試用したことを報告しました。そこで生じた問題として、まず日本語に翻訳することの難しさを挙げました。そ

スタイリッシュなデザインのギリシャ語表記

の日本語版のScaleをスライドで映した時に会場から思わず「Oh ……」という反響がありました。当たり前かも知れませんが、私たちが日常で使っている日本語は世界の中でも特殊な言語であるということなのです。私がギリシャに到着後、一番に目を引いたのはギリシャ語の看板でしたが、その国でしか使われていないマイナー言語であり、2千年前の遺跡にも同じギリシャ語が書かれていました。その独特な文字のデザイン性に魅力を感じていましたが、まさにその逆のことが会場で起こっていました。世界の中の日本という国は私たちの想像とは少し違うかも知れません。説明せずとも、日本語という遠い言語に訳すことの難しさが伝わったようでした。

また各国で言われていることと同じように、Scaleにはアカデミックな言葉がたくさん使われていて、イメージを持つことが難しいという日本の現場の先生たちの意見も付け加えました。そしてまだまだ分析にはサンプルが少なすぎるけれども、使い始めたことで先生たちの意識が確実に変わり始めていたので、その変化の実例として、当園の園庭で起きたことを話しました。

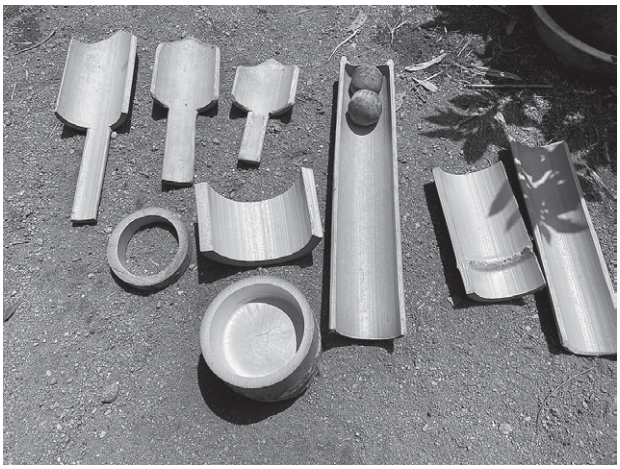
園庭で子どもたちは普段からスコップや飯事のお皿などを使っていて、特に夏場はリユースしたペットボトルを水遊びに使ったりしていました。子どもたちは何かを土に埋めたり、隙間があればそこに落としてみたり、なんでも試すことが大好きですよね。ある時、園庭の隅で子どもたちと土を掘って幼虫を探していた時に、中から劣化したリユースペットボトルが出てきたのです。穴を開けたペットボトルが割れ、柔らかくなり劣化が進んでいて、一部は土にも混ざっていました。「虫が食べたんかな?」そんなことを言う子もいましたが、加工をしていたためか劣化が早かったのかも知れません。

当園ではその1か月ほど前にScaleを試用したところで、ふとあることに気づきました。園庭で使っているおもちゃはすべてプラスチック製だったのです。しかもスコップは使っているうちにどんどん先端が削れて、形が変わっているものもあります。

「スコップの先っちょはどこに行ったん?」という子どもの声、その時、ふと海洋のマイクロプラスチック問題を思い出しました。実際はプラスチックの混ざった土の中で何が起こっているかわからないのですが、そんなことを考えたのはある理由があります。

というのも、その前年夏に子どもたちと園庭の生き物調査をしていて、後々数えると私たちの園には78種以上の生き物が住んでいることがわかりました。そんな生き物たちと共有している場なので、**園庭は私たちだけのものではありません。**

何か変えなければいけないと感じていたとこ



“アジアの素材”として好評だった自園で作っている竹製のおもちゃ

シンポジウムでの発表の様子

ろに、近所からたまたまもらった竹があり、それでおもちゃを作れないかとアイデアを出した職員がいました。実際に竹がプラスチックよりもよいかはわかりませんが、自然に還る環境に負荷の少ない素材であることは間違いありません。また京都では、竹は手に入りやすい素材でもあります。そこで、まずはリユースであってもプラスチックの消費を少なくしようと自然素材のおもちゃを増やしています。

その後、ESDに関する園の実践を2つ発表して、日本からの発表としました。

私たちは日本に住んでいますが、同時に地球の住人でもあります。このVUCAな世界でその社会を担う子どもたちが強く生きることのできるように、「Think globally, Act locally」を実践すべく、ぜひともESD Rating Scaleを使って世界とつながってみてください。

ウルグアイからの登壇者、ガブリエラさん

全私保連
自然災害
サポートシステム

自然災害発生時に被災状況の報告をお願いします

今、災害発生時に地域で助け合う「共助」が注目されています。「全私保連自然災害サポートシステム」は、まさに加盟組織・各園同士で助け合う共助のツールです。このシステムを活用することで被災状況を迅速・的確に把握・情報共有できて、行政のサポート（公助）が届くまで、少しでも多くの施設へ可能な限りの支援を行うことができるようになります。

災害報告フォーム
はこちら

① QRコード

② URL
https://zenshihoren.com/

アクセスすると報告画面に移動します
被災状況をご入力ください
（全私保連事務局＋全私保連加盟組織事務局へ送信されます）

問合せ　公益社団法人 全国私立保育連盟　組織部
TEL 03-3865-3880　FAX 03-3865-3879